

岡山大学 MONTHLY DIGEST

VOL. 31
2018. 11

TOPICS

1

大学祭(津島祭、鹿田祭)を開催



本学は11月2日～4日、津島キャンパスで津島祭(3日まで)、鹿田キャンパスで鹿田祭を開催しました。

津島祭は「平成最後の岡大祭～渦巻く我らの大喝祭～」をテーマに開催。当日は会場中がバラエティ豊かな模擬店で彩られ、恒例の文化系サークルの展示や音楽系サークルのライブも行われました。清水記念体育館で行われた「BOYS AND MEN」のプロコンサートも大いに盛り上がりました。

鹿田祭は、医学展やメディカルチェックコーナー、歯学部学生によるブラッシング指導など医療系キャンパスならではの催しが行われました。またサークルによる各種模擬店のほか、カラオケコンテストや女装コンテストといった参加型イベント、最上もがさんのトークショーもあり、多くの観客が訪れました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id8048.html

TOPICS

2

がん治療法・ホウ素中性子捕捉療法(BNCT)の 新たな薬剤開発で共同研究契約を締結

岡山大学中性子医療研究センターは、中性子線を使ったがんの治療法の一つBNCT(ホウ素中性子捕捉療法)におけるより効果的なホウ素薬剤の開発に向け11月2日、株式会社スリー・ディー・マトリックス(3DM)と共同研究契約を締結しました。

BNCTで一般的に使われるホウ素薬剤はがん細胞に取り込まれやすい特性がありますが、がん細胞を破壊する効率が低く、大量のホウ素薬剤を投与する必要があり、患者への負担が指摘されていました。

NTRCは、別の既存薬と、3DMから提供を受けた溶液を混ぜ合わせて投与すると、がん細胞に効率よく取り込まれることを発見。この方法は、岡山大学が単独で特許出願を済ませています。今回の共同研究契約により、現行品より使いやすく、効果の高い薬剤の実用化を目指します。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id577.html11月2日に行われた記者会見で、研究内容を説明する
中性子医療研究センターの古矢修一副センター長

最近の大学の取り組み

平成30年7月西日本豪雨災害学生ボランティア報告会を開催



11月17日、大学コンソーシアム岡山主催の「平成30年7月西日本豪雨災害 学生ボランティア報告会」を津島キャンパスで開催しました。

学生40人、大学関係者49人、行政関係者ら15人が出席。開会のあいさつとして、大学コンソーシアム岡山の会長を務める本学の榎野博史学長が本報告会の趣旨などを説明。兵庫県立大学の富永良喜教授から、学生ボランティアが感じるストレスやボランティアを通しての成長について講演があった後、過覚醒に対するリラクゼーションや絆を深める「絆のワーク」を体験しました。

分科会やパネルディスカッションも行われ、学生らは、自身が行ったボランティア活動や、感じたことなどについて報告しました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id8089.html

持続可能な岡山医療に向けた 医療連携シンポジウムを開催

本学は11月6日、持続可能な医療の提供をテーマにしたシンポジウムをJunko Fukutake Hallで開催しました。本シンポジウムは、岡山市内に病院をもつ6団体で構成する岡山医療連携推進協議会が岡山経済同友会、岡山商工会議所との共催で開催。岡山市内の医療機関による連携の在り方について、産学官などの関係者が意見を交わしました。

当日は医療、行政、経済界から約250人が出席。榎野博史学長が、協議会の設立経緯や医療人材の育成と治験・臨床研究の連携を構築する活動について紹介。「治験の品質向上や実施件数を増やし、地域経済の活性化にもつなげたい」と将来構想を披露しました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id8063.html



学生二人が日本代表として 世界ユースサミットOne Young World 2018に参加



文学部4年の阿部若奈さんとマッチング・プログラムコース4年の大内田裕美さんが、オランダのハーグ市で10月17日～20日に開催された世界ユースサミットOne Young World 2018に日本代表団の一員として参加しました。本学は2015年タイ・バンコク市で開催されたサミットから公式パートナーとして参画しており、4大会連続の出場です。

阿部さんと大内田さんは、全体セッションやワークショップ、交流会などに参加。国連の持続可能な開発目標（SDGs）を枠組みとしながら、気候変動や戦争と平和、教育、人権、リーダーシップなど、多岐にわたるディスカッションを行いました。全体セッションでは、ノーベル平和賞受賞者のムハマド・ユヌス博士やユニリーバのCEOポール・ポールマン氏をはじめ、現職の世界のリーダーや各国代表者らのスピーチを聴講しました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/news/news_id8068.html



日本の結核の動向を詳細に解明 結核撲滅に向けての取り組み、加速が必要

岡山大学大学院ヘルスシステム統合科学研究科の狩野光伸教授と大学院医歯薬学総合研究科の小山敏広助教の研究グループは、国内外の研究機関と医療機関の研究者との共同研究において、これまで不明であった日本国内の結核の罹患率や死亡率の長期的な傾向を、詳細に明らかにしました。

結核は不治の病と恐れられてきましたが、現代でも世界で毎年約1000万人が罹患し、約160万人が死亡する世界三大感染症の一つです。本研究グループは、1997年から2016年の20年間における、日本国内の新規登録患者数と死亡者数を調査。男女とも、この20年間で新規登録者数と死亡者数が減少していることが判明しました。本研究成果は、2018年11月9日に英国の医学誌「Epidemiology and Infection」に掲載されました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id578.html



DNAを自己分解してリン栄養分にする生命現象の発見 ～種子植物の普遍現象・細胞内共生由来のDNAで～

岡山大学資源植物科学研究所坂本亘教授と高見常明技術専門職員、神戸大学、広島大学の研究グループは、細胞内のDNAが自己分解され、リンの栄養分として再利用される生命現象を明らかにしました。

植物の光合成を行う葉緑体や呼吸をつかさどるミトコンドリアは、太古の昔に細胞内共生により獲得した、バクテリア由来のオルガネラDNAをたくさん持っています。これらの、一見不要と思われる過剰のDNAは、リン栄養が欠乏した状態になると積極的に分解され、再利用されていることが今回の研究で明らかになりました。

リンは植物の三大栄養素の一つで、21世紀にはリン肥料の枯渇や水質汚染が懸念されています。本研究成果により、DNA分解を介したリン酸利用効率の向上性が分かり、これらの知見を用いて養分利用を改善させた作物の改良にも結びつくことが期待されます。本研究成果は、11月12日に英国の科学誌「Nature Plants」誌で公開されました。

参考 http://www.okayama-u.ac.jp/tp/release/release_id579.html

